

## フィロストラトスの「構想力」(一)

深田 康算

一

フィロストラトス Philostratos の名は美學史上二つの注目すべき著書に結び附いて残つてゐる。其一は「チアナのアポロニウス傳」Vita Apollonii Tyranensis 其一は「イマギネス」Imagines である。さうして前者の中の或個處に見えてゐる言説は、フィロストラトスをして、希臘の傳統的美學思想を超脱して全然新らしき一個の概念を美學に齎らし來れる者と見做さしめるに足るかとも解せられうる所のものを含んで居り、後者の「繪畫に就ての記述」は色々の意味に於て古代に於ける藝術批評に關する吾々の知識を豊富ならしめる所のものを持つてゐる。

プロチノスやロンギノスと略時代を同じくしてゐる點でも興味を惹く所の此フィロストラトスは、しかし、唯一人の人の名でない故に、吾々の意味するフィロストラ

トスと同じ名を以て呼ばれる所の他の人々が先づ區別されなければならぬ。  
「チアナのアポロニウス傳」の著者たるフィロストラトスと「イマギネス」の著者たる其れどが同人であると云ふことすら今は寧ろ疑はしくなつてゐるやうである。エドアルド・ミュラー E. Müller, *Geschichte der Theorie der Kunst seit den Alten*, 1837 は「思ふに恐らく「アポロニウス傳」の著者フィロストラトスに創造的構像力 Schöpferische Phantasie の概念の創見を歸すべしとした最初の學者であるが、彼は明らかに此フィロストラトスを以て「イマギネス」の著者と同人であると見做してゐた。後に引くキユルベも、又「イマギネス」に就ての詳しい研究を發表した佛蘭西のベルトラン E. Bertrand, in *Critique d'art dans l'antiquité, Philostrate et son École*, 1881 とブーサー A. Bougot, *Philostrate l'Ancien, une Galerie Antique*, 1881 との兩人の如きも亦其著者と「アポロニウス傳」の著者とを以て同じ一人の大フィロストラトス即ち Philostrate l'Ancien であるを見做してゐる。此——面倒な——問題は吾々に取りて差し當り重要なものでない。二書が同一人たるフィロストラトスの筆であるとしても、若しくは同じ一家の近き親族であつた二人のフィロストラトスの手に成つたとしても、孰れにしても吾々には大なる關係のないことであるが、衆説を考査してフィリモア J. S. Philimore, *Philostratus in Honour of*

Apollonius of Tyana, 1912 Vol. I. P. XXXIV—XLV. の概説する所に従へば「アポロニウス傳」の著者はアテンのと呼ばれたるフィロストラトスであり「イマギネス」の著者はレムノスのと呼ばれたるフィロストラトスであると云ふことになる。さうして兩人の間の關係は恐らく後者が前者の姉妹の夫であつたであらうと云ふことになる。それで同じフィロストラトスの名の下に傳はつて來た著書全部所謂 Corpus Philos. tratum はつまり同じ一家に屬する然し別々の人の手に成つたものと云ふ。(勿論「イマギネス」續篇が「アポニウス傳」の著者とは別人の手に成つたものであり其甥若しくは孫の作であると云ふこと及びフィロストラトス全書に收められてゐるものゝ中に僞作のあると云ふことなどは早くから注意されてゐたのである。) 今便宜のためフィリモアの掲ぐる想定系圖に據れば次の如き關係となる。

ヰエルス Venus の子フィロストラトス(フィロストラトス第一)

其子

其娘の婿

フィロストラトス第二。

フィロストラトス第三

(即ちアテンのフィロストラトス)

(レムノスのフィロストラトス)

フィロストラトスの「構想方」

「アポニウス傳」ソフィスト達の傳」

其他を著はす。

「イマギネス」正篇二卷

其他を著はす。

一女

フィロストラトス第四。

「イマギネス」續篇を著はす。

之れで見れば今迄に色々の學者を惱ましたフィロストラトス考の問題も略解決されると云へやう。又そこからして「アポニウス」傳の著者たるフィロストラトス第二が最も有名であつた事實を考へ合せるならば、フィロストラトス第四の「イマギネス」續篇に對して正篇とも呼べるべきフィロストラトス第三の「イマギネス」が、如何にして直ちにフィロストラトス第二の作と見做されるやうになつたかも推察するに難くはないであらう。フィロストラトス第四 Philostrate le Jeun に對して云へばフ

イロストラトス第三も Philostrate *l'ancien* であると共にフィロストラトス第二も同様に亦さう呼ばれてよいからである。(詳細の點は前掲フィリモーア參照)。

しかし孰れにせよ、此問題は吾々に取つては重大なる關係はない。吾々の問題としてゐる側面から見れば「アポロニウス傳」と「イマギネス」の間に如何なる關係があるとも又は無からうとも何等の増減はない。それほど此二書のそれぞれ吾々に提供する問題は別々なのである。若し何等か其間に共通なるものが見出されるときれば、それは唯繪畫に就ての關心といふ一點のみであるであらう。さうして其點から云へば、此二書が同じ時代に現はれたと云ふこと、若しくは尙一步を進めて同じ一つのソフィストの家から生まれたと云ふことは其時代の精神を特徴付けるものとして極めて興味あるものと云はなければならぬ。

## 二

フィロストニトスの「イマギチス」(若しくは「エイコネス」)はゲーテが畫家達の爲めにその解説を試みたほど藝術家及び藝術觀照家の教育と啓發とに役立つとも見られたことがある。その後考古學者の考察の對象となるに至つた以前から唯單に

面白き讀み物として認められて居たのは尙古くからであらう。希臘人が政治問題に若しくは現實問題に興味を失つて、所謂ソフィスト達は題材を繪畫や彫刻に求めるやうになつてから、修辭學の領域を藝術の題目へまで押し廣めるべく余儀なくされたゝめの産物とも見られる所の此繪畫に就ての記述は文學としての藝術批評の祖であるとも云へる。(此所へ達するまでの道程の上にあるものとしてルキアノスが考へられる)。それと同じ必要とそれと同じ精神からやはり生れて來た——但し別の題材に向つての——産物たる「アポロニウス傳」も亦つまりはソフィストの修辭學的試みと見做しうるであらう。(ツエラーに依れば此書は傳説的人物の名を借りてピタゴラスの敎説を稱へる目的の下に書かれたものであり、史料としては殆んど全然使用するに堪えぬものである。フィリモーアガ In Honour of Apollonius と譯して Life of Apollonius と譯さないのも此書が「アポロニウス傳」とは名づくべきものでないからである)。その半ば小説的なる半ば福音書的なる「アポロニウス傳」の中から美學史上に於ける劃期的なる學説を發見し得たとするならば、それは極めて難有きことであるに相違ない。さうしてこの二つの書が唯一人の手に依つて著はされたとするならばそれは愈々面白きことでなければならぬ。

ミュラーに依れば(前掲書第二卷三一六一―三二七)大フィロストラトス *der ältere Philo-  
stratus* は「イマギネス」の著者として、繪畫の理解ある鑑識家であつたことの明らかな  
るのみならず、「アポロニウス傳」に於ける言説から推せば彼は又實に創造的構想力  
*Phantasia* を以て藝術に於ける最高なるものを生む所の能力であること見定めた古代  
人中の第一人者である。さうして之れを證するためにミュラーの擧げてゐる論據  
は、右の傳の第六篇第十九章である。

今此個處の大要を述べるならば、*ダミス* を伴ひ埃及に到着したアポロニウスは、埃  
及の若者なるチマジオンを案内者として裸體行者 *Numroi* を訪ね其長者たるテスベ  
ジオン *Thespion* と次のやうな問答をする。

アポロニウス、私は先づ神々に關して問はう。一體如何なる故に君方は此國の  
人々をして神々をかくも奇怪な滑稽な形相に造らしめるのであるか。皆動物の姿  
ばかりだ。

テスベジオン、(怒りて)君の國の神像はどうか。君の國では神々をどう云ふ風に  
現はしてゐると云ふのか。

ア、理想的美と宗教的崇敬とが要求する所に従つて神々の像は造られる。

テ、君の云ふのはオリンピアのゼウスやアテンのアテナやクニドスのアフロデテなどを指して云ふのだらう。

ア、いや其れ等丈けに限つたことはない。一體他の國々でも神の像を造るのに神らしさと云ふことを忘ればしないやうである。然るに此國の神像を見ると神らしい形のものゝ殆んどない。神々よりもむしろ下等なる動物を禮拜してゐるとしか思はれない。神々を馬鹿にしてゐるやうである。

テ、君の國のフィデアスやブラキシテレスやは皆天に登つて神々の姿を目のあたり模倣したのか。目のあたり見たものに依つて神像を造つたと云ふのか。それとも何にか外に彼等の技術を導いた何物かゝあると云ふのか。

ア、それは別にある。別に立派なものがある。

テ、その別なものとは何か。模倣以外に他の何等かの原理でもあるのか。

ア、構想力 *Phantasia* が此等の結果を生ずるのである。構想力とは模倣力 *Mimesis* よりも遙かに巧みなる技術者である。模倣力はその見た所ものを藝術に於て描き出すことができる。構想力はその見ざりし所のものをさへも描き出す。何故か



なら、それは見ざる所のものを實在するものからの類推に依りて想像することをするからである。模倣力は屢今日の前に見ゆるものに依りて驚かされ畏れしめられるが、構想力は何ものに依りても萎縮せしめられず眞向に理想の目標に向つて進む。例へばゼウスの像を造らんとする者は、フィデアスが心を込めてなしたるが如くに、ゼウスと共に天や四季や星辰をも見なければならぬ。アテナを造らんとする者はアテナの姿と共に戰場や智慧や諸技術やを見又如何にしてアテナがゼウスの頭から躍り出でたかを見なければならぬ。さうだのに君方は鷹や梟や狼や犬を造つてヘルメスやアテナやアポロの代りに殿堂に安置する。動物には大なる名譽であらうが、神を崇がめることからは遙かに遠ざかる。

テ、君の批難は理解ある人の言葉とも思はれない。埃及人に智慧があるとすれば、それは寧ろ恰も彼等が神々の像そのままを自由に造れると自負しない所に存するのである。神々を唯象徴に依りて現はし、其象徴に意味を持たせる所にある。それがむしろ神々を崇敬する心に於て優ると云ふべきではないか。

ア、(笑ひながら)埃及の學者から教はる教訓とは犬や蒼鷺や牡山羊に何にか特に神々しさがあると云ふこと丈けなのか。それがテスベシオンの智慧なのか。其等

のものに意味を持たせると云ふならば、むしろ尙一步を進めて何等の象徴をも何等の像をも置かぬ方が却つて尊嚴を増す所以となるであらう。禮拜者はさうすれば自由に心の中で神の姿を想像することができる。如何なる技術に依りても成し遂げえぬ所のものを心は描き又刻むからである。君方のやり方は神々を目で見ることをも又心で想像することをも不可能ならしめてゐると云ふべきである。

テ、では君の國のソクラテスはやはり吾々の仲間だつたのだね。犬や鶯鳥や籬懸を神と見做して、それ等に依つて誓つたのだから。

ア、いや、彼は愚者ではなかつた、超越者であつた。彼は絶対智を持つてゐた。彼がそれ等のものに依つて誓つたのは、其等を神々と見做したのではない。神々に依りて誓ふことを避けるためなのである。

ミュラーは右の問答の中アポロニウスが構想力 *Phantasia* を模倣力 *Mimesis* に對せしめて其優越を説いてゐるのを以て、古代に於ける創造的構想力の最初の所説であると考へ、傳統的なる模倣 *Mimesis* の概念に對して全く新らしき構想力 *Phantasia* の概念が明らかなる意識を以て此所に説かれてゐると斷定してゐる。斯く此個所を解

釋することが正しいであらうか。吾々は之れに對しては多少の疑なきをえない。然し先づ尙續いてミュラーの述べてゐる所を聽かう。

### 三

ミュラーの考へる所では、フィロストラトスは然かし必しも模倣を藝術に不必要なるものと云つてゐるのではなく、寧ろ吾々が再現的想像力 *reproduktive Einbildungskraft* と呼ぶ所のものゝ有する役目を模倣に認めてゐるのである。フィロストラトスが一方に於て創造的構想力を新たに説くと共に他方に於ては模倣を再現的想像力として認めることを忘れなかつた證據としてミュラーは第二篇第二十二章を引照して居る。

印度の都タキシラ Taxila に一個の寺院を訪ねた時印度遠征に於けるアレキサンダー大王の奮戦の光景を描ける青銅浮彫が四方の壁に懸けられてあるのを見てアポロニウスと其弟子ダミスとの間に次のやうな會話が起る。

ア、繪畫なるものは存在するか。

ダ、眞理が存在する如くに繪畫も亦存在する。

ア、畫家の仕事は何にあるか。

ダ、諸種の色を混ぜ合はすに在る、青とか緑とか白とか黄とか赤とか黄とかを。

ア、しかしそれを混ぜ合せ目的は何にあるか、それは蠟燭の如くに單に眩き表面の印象を生ず丈けなのであらうか。

ダ、目的は模倣にあるのである。犬や馬や人物や船、太陽の見てゐるあらゆる事物の正確なる像を造くるにある。否、太陽そのものゝ像をさへも描くと云へる。

ア、繪畫はそれでは模倣だと御前は云ふのか。——然し雲を見よ、雲は群がつて色々な形となる、或ものは半人半獸のケンタウルの如く、或ものは紋章の動物の如く、加之狼の如く又馬の如き形ともなる。是等皆總じて模倣とも云へるではないか。さすれば神は即ち畫家か。子供等が砂に描かくやうに、神も亦暇を得るや即ち是等の像を大空に描いて楽しむのであるか。さう云つたら滑稽になつてしまふ。——さうではないのだ。あの雲の形は偶然に出來上るのである、神意に依るのではない。唯之れを見る人間が模倣の本能を持つてゐるが故に色々なものに似た形と見るだ

けである。——して見れば、模倣の技術には二種あることが分かる。一は手を働かし心を働かして物の姿を再現せしめる。繪畫は即ちそれだ。他は物の姿を唯單に心に於て描くことである。

ダ、いや二種ではありません。手と心との兩方で物の姿を再現することができた時それが本當の意味での模倣である。もう一つの模倣と云ふのは此模倣の一部分に過ぎない。心の中で姿を見又描くことができても畫家であることはできない。手がそれを成し遂げるために伴はなくては。

ア、如何にも模倣の本能は自然から與へられ、描寫の遂行は技術から與へられるのである。然し繪畫と云ふ時それは必しも彩色せるものゝみを意味してはならない。昔は唯一色の繪の具で描いた少し進んでからは四色を用ゐた後世に至つて多くの色を用ゐるやうになつたのである。姿は色なくして唯線のみでも描くことができる。彩色を施さぬ輪廓だけでも例へば黒い印度人の黒さを暗示することができやう。——そこで私は云ふのである。畫家の作品を見る時吾々は吾々自身に於て模倣の能力を持つてゐるのでなければならぬと。何故ならば吾々が己にその物の觀念を持つてゐるのでなければ、その物の繪を見てそれがよく出來てゐるなど、

は云へないからである。例へばチマンテスのアイアコス（狂亂のアイアコス）を見てそれを賞賛するものは、如何に彼れが彼れの状態に於てはあらねばならぬかを心に描くことができなければならぬ。

之れに基いてミュラーはフィロストラトスが此所では外部的手に依れる模倣と内部的（心に依れる）模倣とを區別し居る、そして内部的模倣と云ふのは即ち再現的想像に當ると考へたのである。ミュラーに従へばフィロストラトスはつまり三つのものを區別してゐると云ふことになる。一はフィデアスがゼウス像を造つた場合に於て働ける如き「見ざるもの」を「實在するもの」に類推に従つて創造的に構想する力、一つはチマンテスの「アイアコス」を畫家ならぬ人々が見る場合に働いてゐるのでなければならぬ所の再現的想像力、さうして一つは「目に見ゆる所のもの」に忠實なる模倣。此三つのものゝ分類は然し云ふ迄もなく極めて不確實である。上掲の二個處を再び読んで見さうしてミュラーが之に就て解説する所を較べて見る時、吾々はミュラーが此等の個處から何物かを引き出さうとする企ての果して成功するかを甚だ覺束なく感ぜざるをえない。

繪畫は手に依りて及び心に依りての模倣であると云ふのは正しいであらう。自ら描く技術を有せざるものは唯心に依りて模倣すると云ふのも亦正しいであらう。然かしフィロストラトスが此所で「心に依りての模倣」と呼んでゐる所のものが唯單に再現的想像に當ると取ることの許されないのは「手と心とに依りての模倣」たる繪畫が單なる再現的想像力に基かずして寧ろ「模倣よりも尙巧みなる技術者構想力」に基くと云はれるからである。若し繪畫が單なる模倣であり再現であるとすれば、之れを見て賞め賛へる所の者の「心」に依りての模倣は成程再現的想像力の働きであるとも云へやう。しかし繪畫が己に創造的構想力に基くことが許される以上、心に依りての模倣も亦單なる再現的想像ではありえぬと云はなければなるまい。ミユラーが上の二個處に就て、前の場合に於ては創造的構想力を、しかし後の場合に於ては再現的想像力を説くものとして、兩者を區別しようとするのはさうだからして、無理である。彼の解釋は畢竟模倣とは何か再現とは何か若しくは創造的構想とは何かを十分に見定めることなくして、唯單にフィロストラトスの用語に惑はされてゐるのだと云ふより外はないやうである。

## 四

恰もキユルペはミュラーの此誤解を指摘して居る。O. Külpe, Anfänge psychologischer Aesthetik bei den Griechen, in "Philosophische Abhandlungen" Max Heinze zum 70. Geburtstag gewidmet, 1906, s. 117—121. キユルペも亦フィロストラトスを以て創造的構想力の概念を打立てたる最初の人だと考へる點に於てはミュラーに従ふのであるが、かの二個處に於てフィロストラトスの説く所のものを別々の事だとは見ないで寧ろ同じ事を云つてゐるのであると解釋する。即ちミュラーが一方に於ては創造的構想力一方に於ては再現的想像力と解する反して「心に依れる模倣」とは即ち創造的構想力に外ならぬと見做すのである。

キユルペは云ふ。此二個處からして直ちに吾々の注意を引くことは二つの點である。一は模倣の概念が此所で明瞭に擴張せられるに至つたと云ふこと、一は創造的構想力と云ふ模倣とは異なる原理が導き入れられるに至つたと云ふこと。殊にこの第二の點はミュラーの指摘せる如く極めて劇的に説き進められ、未だあざざりし新説が説き出されて居ると云ふ印象を残す。しかし二つのことは密接に關係



して居る。何故ならば第二篇に於て説かれてゐる所の内部的「心」に依りての模倣は「見られざるもの」の模倣をも包含する。例へば印度人の輪廓に於て黒き色を想像する即ち内部的に模倣する場合はそれである。さうして第六篇に於て説かれてゐる所の構想力とはその創造に際して「實在するもの」即ち經驗をたよりとするものと云はれてゐる。此兩者の間に本質的の區別は存しない。内部的模倣が知覺さるゝものゝ補充である點に於て、それは構想力から區別されえないのである。さうであるからしてフィロストラトスはその「繪畫に就ての記述」に於て、構想力と同義なる *Sophia* を、單に其れの嚴密な意味で云ふ所の創意 *Erfindung* の場合に用ゐてゐるに止まらず、内部的模倣に依りて補充されることに依りて生ずる物の内部的眞 *innere Wahrheit* の場合にも此語を用ゐてゐるのである。と。

キユルベの此理由は吾々の上に述べた理由とは異なつたものであるが、ミユラーが二つに區別しやうとすることの謂はれなき所以を指摘するには十分であらう。問題は、しかし、ミユラーやキユルベや又——直接にミユラーから其説を踏襲したものであるか否かは分らぬが——ブツチャー及びサンデイス Butcher, Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art, 4 edition, 1920 P. 127, Footnote 1. — Sandys, The Pheloric of Aristotle, Jeff

rs translation P. 47. などの見る如くに創造的構想力 Schöpferische Phantasie の概念を以てフロイストラトスに歸することが正しいであらうかに在る。(未完)